

第2回 災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました (2016/12/20)

テーマ：地震工学と災害医学との学際研究のこれまでとこれから
場所：東北大学医学部（宮城県仙台市）

12月20日（火）、災害科学国際研究所「災害と健康」ユニット、および、「防災教育・人材養成」ユニットの共催により、第2回災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました。災害に際して有効に命や健康を守るための基盤となる学際融合研究の促進を目的とする本セミナーの第2回目の演者として、災害科学国際研究所「防災教育・人材養成」ユニットの佐藤健教授をお招きして、「災害と健康」ユニットの富田博秋教授の司会の下、「地震工学と災害医学との学際研究のこれまでとこれから」と題してご講演を頂きました。

講師らによる2003年宮城県北部地震の際の外傷者を受け入れた医療機関を対象とする調査結果に基づいた、室内の家具転倒による負傷者の実態の分析等の研究結果が紹介されました。カルテの負傷原因の記載がないことから、十分な実態把握が困難であったこと等の言及があり、外傷の予防に関する研究と実践における医学と建築学との更なる緊密な連携の必要性と有用性が示唆されました。また、宮城県北部地震での教訓を踏まえての災害に強い地域づくりおよび次世代育成に向けた「災害に強いコミュニティのための市民フォーラム」の開催、「CERT（コミュニティ緊急事態対応チーム）宮城モデル」の実現化に向けた検討、地域に根差して実質的に活動できるリーダー養成プログラムとして「仙台市地域防災リーダー（SBL）」育成プログラムの運営等について説明して頂きました。さらに、東日本大震災発災後の取り組みとして、大規模災害により通信・道路が遮断された各被災地域拠点における情報収集を支援するためのITボランティアの派遣やクローズドメーリングリストの設置などの「災害保健医療支援室」による支援事例を教えてくださいました。

今後、高齢化社会に向けて高齢者の負傷リスク軽減を図るために、支援する側のコーディネーション、「顔の見える関係づくり」が重要であることが強調されていました。また、応急仮設住宅に起こりやすいシックハウス症候群の改善など環境工学分野と保健医療との学際的連携の可能性が提案されました。最後に、学内の災害危機管理や緊急災害対応体制の構築に向けた文理融合・産官学連携のあり方等が示唆されました。



会場の様子



佐藤健教授